令和3年度 第1回 安倍川水系流域委員会 議事要旨

■開催日時・場所

日時：令和3年10月1日（金） 13：00～14：00

場所：WEB会議

■出席者

戸田委員長、土屋副委員長、板井委員、大石委員、絹村委員、大久保委員、竹内委員、三浦委員、湯浅委員

■議事内容

(1) 最近の河川事業を取り巻く話題

- ・安倍川の侵食原因は、網状河川であること以外にも、河床が高水敷に達する程に高くなっていること、及び河道掘削等の河川工事や砂利採取に伴う河道内の攪拌により、出水時の流れが変わりやすくなることが考えられる。今後の侵食対策はどのように考えているか。
⇒侵食対策は、巨石付き盛土砂州や水制工等の整備により、なるべく河岸から離れるような流れにしたいと考えている。
- ・今後の河道掘削は、平面的にスポット状の四角い掘削ではなく、洪水流の縦断方向の連続的な流れを期待できるように、縦断的な掘削の検討をお願いしたい。
⇒縦断的な掘削について、検討していきたい。
- ・油山川では、瀬の石が小さくなってきている。大きな石は、良好なアユの生息環境を創出し得るが、石が小さくなる程、河床は動きやすくなり、アユの生息環境は劣化する。このため、河道掘削の際には、大きい石は残してほしい。
⇒現状、大きな石を残した河道掘削はできていない。大きな石を残すといった作業ができるかについては今後の課題としたい。
- ・河道中央付近を掘削した場合には、洪水流は掘削部を流下するのか。事務所としては、掘削部を流下しなくとも、河道中央寄りを流下すればよいと考えているか。
⇒掘削にあたってのもともとの思想で、極力川の真ん中をスムーズに海まで土砂を流すとの総合土砂管理の考えもございしますが、今の掘削の目的は、河床が高いところの土砂の撤去や土砂利用で、真ん中を掘っています。それで流れをコントロールできるとは思ってなく、安倍川は網状河川であり、すぐに元の濬筋に戻るものと考えています。
- ・降雨により本川が白濁した場合には、アユは油山川や足久保川等の澄んだ支川に逃げるはずだが、今年は殆ど見られない。これは、河道対策により本川と支川が分断されているためと思われる。川では分断により、生物の多様性が急速に失われるため、本

川と支川の繋がりには極力大事にしてほしい。

⇒油山川、足久保川の生息環境については、先生方とも相談しながら進める必要がある。ただ、本川と支川の連続性確保に配慮した工事は可能と思うが、洪水時に大きな自然営力に伴い土砂が移動する実態の中で、必ず本川と支川が連続するように流れをコントロールすることは難しいと考えている。

- ・安倍川水系流域治水プロジェクトについて、流出抑制対策にある「農水（田んぼダム）」の具体的な検討は始まっているのか。それとも、今後検討するのか。

⇒田んぼダムによる対策を実施する場合には、各自治体での取り組みとなる。現時点では、田んぼダム対策実施の具体の目途はないが、取り組みの可能性として示している。田んぼダムの形状については、現在、浜松河川で実証実験を実施しているため、これらの事例を参考に取り組みを考えていきたい。

- ・川の歴史や川と市民の生活の関わりについても一緒に水防災教育学生サポーター制度に組み込んでいただければと思う。

⇒水防災教育学生サポーター制度には、川ごとの歴史や地名等の教育についても、可能であればできれば組み込み、水防災に繋げていきたい。

(2) 安倍川水系河川整備計画の点検について

- ・安倍川は、網状河川ではあるが水衝部はある程度固定されていないか。固定された箇所はウイークポイントとなるので、水衝状況を勘案した掘削が望ましい。

⇒掘削による滯筋のコントロールは難しい。網状河川ではあるが、水衝部になり易い箇所は、盛土付き砂州や水制等により、ある程度流れをコントロールできればと思う。

- ・掘削土はどのように処理しているのか。

⇒掘削土は、静岡海岸、清水海岸の養浜材として使用している。また、砂利業者による採取の場合には、一部がコンクリート材としての利用されている。

- ・網流する区間の滯筋に形成された浅瀬は、伏流水の湧出する場所となり、アユの産卵場所となることから、網流する状態を維持してほしい。また、20年位前から5年間ほど、砂利採取の組合からの依頼により産卵状況を調べた結果、産卵場が上流側へ移動して油山あたりでも行われつつあり、これらの場所が網流している区間であったことから網流する状態を維持してほしい。

- ・網状河川である特性は、自然の営力で決まるものである。事務所としては、洪水流を河道中央付近に流すというよりは、河岸側での水衝回避、あるいは水衝部は極力河岸を強くする等の網状河川の特性と河岸防御を組み合わせたことを狙っていると思うので、これらを踏まえて回答いただきたい。

⇒今後の掘削は、必要に応じアユの産卵場に配慮して実施する。河岸防護は、河道掘削による河道中央への洪水流の誘導ではなく、巨石付き盛土砂州等によりある程度、

流れをコントロールすることで対応できればと考えている。

- ・安倍川の河口部では河口閉塞により、魚の行き来がなくなる。頻繁に人工的に閉塞部を開放してもらうが、手間も危険も伴うので、洪水により自然に閉塞を解消する方法はないか。また、水制工については、洪水時の流れを考慮し、河岸法線に対して直角ではなく角度を持たせて設置してほしい。

⇒河口部では掃流力が小さくなり、河口閉塞が生じやすい。洪水流により閉塞部を開放したいが、難しく検討が進んでいない。今後、何らかの対応を考えたい。河岸防護については、現在の計画は、上流部では水制工を河岸法線に対し直角に設置、下流部では巨石付き盛土砂州により流れをコントロールすることとしている。今後も検討を進めていきたい。

- ・河床掘削により河床上昇は抑えられているのか。

⇒今年の出水に対しても、前年度の掘削による水位低減効果が確認された。

(3) 今後の進め方

- ・今後、整備計画の変更を考えている。
- ・今後の進め方について特に意見はないため、本日の議事についての審議を終了する。

以上